
C#

双六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C#

【Nコード】

N2852Q

【作者名】

双六

【あらすじ】

25歳になった僕、上手くない仕事、友情、そして恋愛。大阪を舞台に、どうしようもない自分が、何かしなくては！と頑張れば、頑張るほど、思っているのとは違う方向へ・・・

素敵な文章

彼女の為なら、命だって惜しくはない……

そんな格好のいい台詞を、心から言える、
そんな強い男になりたい。

そんな事を、思い続けてもう何年たったんだろう……



「で、居酒屋の面接どうやったん？」
と電話越しに聞こえるのは、水本の声だった。

「あ、うん、明日から来てくつれって……
なんか、気に入ってくれたみたい。」

水本《みずもと》は、僕の中学時代の同級生、
高校を卒業後、専門学校に行き、
今は、車の整備士をしている。

「まあ、とりあえずのバイトにしても、早く定職探せよ、
もう25歳にもなるんやから、いつまでもフリーターってのもな、
だいたいお前は……」

こいつは、電話をかけてくると決まって僕に長い説教をする、

「仕事は決まったのか？」

「実家には帰っているのか？」

「彼女とは会っているのか？」

「自炊もしろよ！」

まるで、母親の様な説教をする。

まあ、25歳にもなつて自立していない僕に説教してくれるのは、

こいつぐらいなもんだ、

親ですら、最近は何も言わなくなった。

たまに電話をかけてきては、暇つぶしでも長々と説教をしてくる水本には感謝している。

「おう、分かってるよ・・・」

明日から行く、居酒屋のバイト、仕事覚えたら正社員にしてもいいって言ってくれたし。」

「そうか！良かったやん！ほな、とりあえず週末に誰か誘って飲みに行くわ！」

安くしてくれる様に店長に頼んでや！」

「アホか！入りたての俺が、そんなん言える訳ないやろ！？」

「ガハハ！冗談やん！じゃ、週末な！」 ガチャ・・・

と、いつも長々と説教をし、数日後の約束をしたら、

自分勝手に電話を切るのも毎度の事だ。

水本とは、学生時代から、そんな男であり、僕の親友だ。

僕は、今日の面接で、明日の初出勤にノートを持ってくるよういわれたのを思いだし、

近所のコンビニに向かった。

この辺りは、大阪市内とはいえ、繁華街から離れた緑の多い場所だ、近所には大阪城を囲む、大阪城公園があり、犬の散歩や、ジョギングをする人、観光客、

あとは、住所が大阪城公園という青いシートで暮らす人達で一年中賑わっている。

僕も、ここを気に入っているし、彼女もここを好きだと言っていた。

僕は、その公園を横目に、歩いた。

彼女に、仕事が決まった事を伝える、素敵な文章を考えながら・・・

僕は有田。よろしく(前書き)

僕の、親友と彼女との出会いは中学2年生の春でした。
二人とも、当時の僕のはずごく衝撃のある出会いで・・・
今でも、その当時を思い出すと心がキュンとなります。

僕は有田。よろしく

彼女との出会いは、中学2年生の春。

中学生になって初めてのクラス替えの時だった。

あ・・・水本との出会いも同じ日だった。

始業式の日、決められた新教室に集まると、みんながそれぞれに自分の知った顔を探す、

「おお、また同じクラスやん！」

「あいつ何組になったんや？」

あっち、こっちで、再会や出会いに、大声が飛び交っていた。

もともと人見知りで、友達の少なかった僕は、

ポツリと自分の席に座り、新しいクラスメートの顔を、

チラチラと見る程度だった。

そんな中に、彼女はいた。

窓際の席に座る、その子。

彼女の後ろで揺れる教室の白いカーテンが一層、彼女を綺麗に見せた、

その子の周りには大勢の女子がいた、

みんな笑顔で楽しそうだが、

その子の笑顔は、それを見た者をも幸せにさせる輝きがあった。

クラスの男子もチラチラとその子を見ている様だ。

こういつては、他の女子に失礼かもしれないが、

その子は別格だった。

肩の上で揃った少し茶色いその髪は窓からの日差してキラキラ輝き、白い肌に浮かぶ大きく黒い瞳は吸い込まれる様だった。

そうか、僕は一目惚れしたんだ・・・
他人事のように冷静に、それでいて夢の中の出来事のように、
恋をした。

突然現れた初恋に、心がフワフワして、
なんだか心地良い気持ちになっていた僕を、

ひときわ大きな声と、ひときわ大きな動きで、
邪魔する、変な奴がいた・・・
水本だった。

なぜ変な奴だと思ったか、それは、
当時、髪を染めてる同級生はいたが、
パーマをあてていたのは水本だけだった。
それも、なぜか、大阪のおばちゃんの定番ともいえる、
ゆるいくるくるパーマ。
それは、不良の先輩にも一目置かれるほどの
強烈なインパクトだった。

「こいつは小学生の頃の友達やねん！」
「お前、見たことあるな？誰やった？」
「お前こいつ知ってるか？」

ひときわ大きな声で、友達の輪を広げていく。

「俺は水本。よろしく！」
「俺はハンドボール部の水本。よろしく！」
「俺は水本、高川小学校やってん！よろしく！」

友達の友達は皆、友達だ、世界に広げよう友達の輪。

聞いた事のある言葉だったが、目の前でそれを見たのは初めてだった。

僕みたいに、人とうまく付き合えない奴もいれば、こんなに簡単に人と向き合える奴もいるんだな・・・と感心しながら、その様子を見ていたら、

水本と目があった・・・、

僕は、目立つ髪型の水本を何度か見た事はあったが、話した事は無い。当然向こうも僕を知らないはず、まあ、先ほどから水本の自己紹介は耳に入ってきていたから、この男の、名前、大体の住所、部活、兄弟構成まで僕は知っていたけど・・・

「お前は何組やったんや？」

え？

確実に僕に、話しかけている！

まじか！？

水本の奴、いきなり話しかけてきやがった！！

まだ、心の準備できてねえよ！

さっきまで、初恋で心がフワフワして気持ちよかったのに・・・

「一年の時、何組やったんや？」

水本は、もう一度聞いてきた。

(はやく答えなきゃ！)

「3組い」

あ、ひっくり返った！
声が裏返ってもた！

水本の後ろの奴らが、クスクス笑ってる・・・
俺の声を初めて聞いたであろう奴らが、
まさかの裏声に笑ってる・・・

「そうか、じゃ佐々木ー ささき と同じクラスやったんやな」

え？水本は全く笑っていなかった、
僕の、情けない「3組い」を何も無かったようにその後も会話を続
けた。

「俺、水本。よろしくな！」

「あ、うん。僕は有田ー ありた。よろしく」

こいつ、いい奴なのかも
なんか見た目は変わってるけど、悪い奴じゃないな。
会話をしながら人見知りの僕は、どんどん水本の魅力に惹かれてい
った。

それと同時に、水本との会話の最中もずっと気になってしかたなか
った

窓際の彼女、彼女への思いもすごい勢いで膨らんでいた。

これが彼女と水本との初対面、
どういう訳か、その数か月後、水本とは気が合って、気づけば
クラスでは誰もが ニコイチ と呼ぶほど、いつも一緒にいた。

それとは逆に、僕が彼女と初めて話をできたのは、まだまだ先の事
だった。

ねぎ坊主（前書き）

25歳フリーターの僕の新たな仕事は居酒屋の店員。
ビジネス街にある居酒屋ねぎ坊主の週末は忙しい。
そんな中、沢山の野菜の皮を剥きながら、
彼女の事を考える。

ねぎ坊主

週末、僕はビジネス街にある、
居酒屋 ねぎ坊主にいた。

最近、リニョーアルしたばかりらしく、
若い女性も入りやすい、お洒落な外観と、
年配のおじさんが好きそうな、鮮魚や焼き魚の豊富な居酒屋だ。

「いらつしゃ〜せ〜！」

「造り盛りあがったよ〜！」

週末の居酒屋には、貯まりきった疲れと愚痴を土産に
沢山のサラリーマンやOLが押し寄せる。

ねぎ坊主に入店したての僕は、慌ただしい厨房の中で、
汗だくになって仕事をしている先輩達の邪魔にならない様、
厨房の奥にある勝手口を開け、体半分を外に出した状態で
山盛りのジャガイモ、ニンジン、玉ねぎの皮をひたすら剥いていた。
これだけ沢山の野菜が何に使われるのか、
今の僕には、それすらも分からなかった。

今日は、水本が店に来るって言うてたけど、
これじゃ、来たところで僕の存在にすら気づかないだろうな・・・

特に飲食店で働きたかった訳ではない、
なんとなく他の店より自給がよかったのと、
ビジネス街にあるせいか、飲食店には珍しく日曜日が定休日だった。
そんな、曖昧な理由から居酒屋で働く事になったけども、
思っていたよりも地味な仕事だ、

ここにきて3日、まだ包丁をさわった事もない。
与えられる仕事は、店の掃除と、野菜の皮むき、
皮むきだって、先輩はキラキラ輝く包丁で剥くのに、
僕は、プラスチックの皮むき器で剥く。
それが不満な訳ではないけど、
同年代の人達は、社会に出て仕事に慣れてきた頃なんだろうな・・・
ああ、今の僕を見て、彼女はと思うんだろう・・・
なんて劣等感で落ち込む暇を先輩は与えてくれない。

「おいっ！有田！洗物が溜まってるやないか！」
忙しい時の先輩は、何を言うにも怒っているように叫ぶ。

人一倍気の弱い僕は、その度にビクツとしながら、

「ふあいつ！」

と、ひっくり返った情けない声で答える。

ここに、それを笑う人はいない、みんな必死で仕事をしているから、
そんなこと、気付きもしないんだろう。

僕は、先輩の邪魔にならない様、できるだけ体を小さくして、
その結果、とても仕事のしにくい状態で、
山盛りに積み重ねた食器と戦いながら、

今頃、友美　ともみ　は何をしているんだろう・・・？
と思った。

友美というのは、僕の初恋の相手であり、僕の彼女だ。

そう、あの窓際の彼女である。

友美は高校3年の夏休みに家族と行った、旅行先の横浜でスカウト
され、

その8か月後には、

「私、女優さんになる。」と行って東京に行った。

まあ、あれだけ綺麗な女子高生、後にも先にもいるもんか！

友美に横浜で声をかけた、スカウトマンは本当に運の良い奴だ・
と思うのは、当ても今も変わらない。

昨日のバイト終わりに、僕が居酒屋で働く事になったと伝えた。

「居酒屋のバイトが決まって、昨日から働いてるねん！

まあ、始めはバイトからやけど、この居酒屋で頑張って正社員に
なって、

いつか自分の店なんか出来たらええな、と思ってるねん！」

と、小学生が将来の夢を語るように、何の計画性も無い、幼稚で適
当な夢を25歳の僕は語った。

友美は、来月から始まる舞台の稽古が大変だと言っていた、
今回もらった役は、今までの役よりも台詞が多いらしい、

「うれしいけど、他の役者さんに迷惑をかけない様に、いっぱい稽
古しなきゃ！」

毎日の稽古で疲れているはずなのに、それを見せない努力家なところ
は

学生時代から変わっていないな・・・と僕は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2852q/>

C#

2011年1月26日08時50分発行